

妻の出産休暇



管理部
ジェネラルマネージャー

勝村 公一 さん(左)

管理部

小椋 かな絵 さん(右)

企業プロフィール

- 事業内容: 郵便物取扱いに関するコンサルティング、郵便料金最適化システム、その他郵便関連サービス
- 従業員数: 23名(2014年5月31日現在)
- 年次有給休暇の取得率: 51.1%
- 年間休日数: 128日
- URL: <http://www.ms-j.jp/>

会社の実態に合わせた 休暇制度の制定と運用を

実践!

こうすればできる!
こうすればのびる!

- ① 制度の活用範囲はフレキシブルに
- ② 申請手続きを簡略化して、取得しやすく
- ③ 休暇の疑問に答える窓口を設置

仕事と私生活、どちらも大切にす社風

当社は社員数 23 名と比較的小規模で、いわば、お互いの“顔が見える”会社です。社員は全員が中途採用ということもあり、それぞれが独立して、自分たちの裁量で業務を進めています。一方、何かあった時には助け合うという社風ができています。社内には、「仕事もプライベートも大切」という考え方が浸透しているため、“顔が見える”環境を生かして、お互いに周りの人がバランス良く働いているかどうか気を配っています。

「限られた時間の中で最大の成果を出す」という社風も、社員の間にはしっかりと浸透しています。8時半～17時という定時のなかで業務をこなし、「上司が帰らないから帰りづらい」といった風潮もありませんから、ほとんどの社員は 17 時きっかりに帰ります。

「妻の出産休暇」初めての活用

2001 年の創業当初から「妻の出産休暇」を制度化していました。2008 年に会社全体の制度改定を行いましたが、それまで取得実績はなかったものの「妻の出産休暇」は残しました。若い社員が多いですし、「『妻の出産休暇』はあってしかるべき」という考えは変わらなかったからです。また、当時、出産間近の女性社員がおり、その様子を見てみると、夫婦にとって出産は大切な行事であり、同時に大変なイベントだと実感したことも理由のひとつです。

制度の内容は、「妻の出産に関わる事柄であれば、出産前後に 3 日以内の休暇を有給で付与する。どんな形で使ってもよい」というフレキシブルなものです。妻が入院するときの立ち会いや、出産の立ち会い、出産後の妻のフォローなど、使い方は自由です。2013 年に初めて取得者が出ました。この活用事例をもとに、さらに「妻の出産休暇」を社内に広めていきたいと考えています。

申請方法など“制度の使いやすさ”に配慮

「妻の出産休暇」をはじめ、休暇取得の際は、「書類で申請しなければ制度の利用を受け付けない」といったルールはありません。もともと社員の顔が見える規模の会社ですので、一人ひとりの近況は普段から耳に入ってきますから、わざわざ費用や時間をかけて診断書を提出

してもらふ必要はありません。それに、出産の日程は予定通りとは限りません。急な状況にも対応できるように、まずは口頭で申請してもらい、書類記入などの手続きは管理部側でカバーしています。

こうした工夫は少人数の会社ならではだと思えます。会社としては、手続きを簡略化することで、気軽に休暇制度を使ってもらいたいと考えています。初めて「妻の出産休暇」を利用した社員も、妻の陣痛を確認して急遽、取得することになったため、電話連絡で申請を受け付けました。

また、管理部は、休暇に関する相談の窓口にもなっています。社員の状況に合った休暇の提案をしたり、休暇にまつわる疑問に答えたりしていますから、社員は自然と「休暇を取得しよう」という気持ちになるようです。



制度活用事例

「妻の出産休暇」取得で“家族”を強く意識

「妻の出産休暇」について知ったのは、出産の3ヶ月ほど前です。管理部から教えてもらいました。普段から休暇の利用を促す声掛けが多いので、社内には「休暇はしっかり取得しよう」という雰囲気が出ています。

2013年4月、第一子となる長男が生まれた時にこの休暇を2日間取得しました。もともと出産の立ち会いを希望していたので、1日は出産の立ち合いに活用しました。事前申請の必要がないため、妻の陣痛が始まった日の朝、電話連絡で申請できたのはありがたく思いました。営業という仕事柄、普段から出張や外出が多く、私が出産に立ち会えないのではないかと心配していた妻も、この制度を事前に知ったことで安心して出産に臨めたようです。

出産に立ち会い、命の素晴らしさを実感しました。陣痛から出産までに約20時間かかり、妻も相当苦しかったと思いますが、一番苦しい中間地点を共有したことで「良いことも悪いことも一緒にがんばっていこう」という気持ちが生まれ、夫婦の絆も深まりました。

出産後は、午後半休を2度活用しました。1度は退院の時です。退院の日が休日とは限りませんから、助かりました。2度目は、双方の両親が初めて息子に会った時です。3世代揃ってゆっくりと時間を過ごし、良い思い出ができました。“家族”について考えるキッカケにもなりました。

休暇取得で、周囲への気遣いもできるように

この経験で、私自身の息子に対する愛情が強くなったように思います。それに、妻一人に出産・子育てを任せてしまうのは、負担が大きすぎます。私は2人目、3人目の子どもが欲しいので、できる限り妻をフォローして、今後も夫婦で力を合わせて子育てをしていきたいと思っています。

また、同僚の女性に対する考え方も変わりました。以前は「明日から産休に入ります」と言われてもピンときませんでしたが、「元気な赤ちゃんを産んでくださいね」と気持ちをこめて送り出すようになりました。当社には、何かあった時には家族を最優先に考え、そのために休暇が取得できるような職場環境があり、上司のサポートもあります。今後は私も、周りの社員に「妻の出産休暇」を勧めたいですし、仕事の面でも率先してサポートしていきたいと考えています。



営業部
マネージャー

谷口 淳平 さん